



兵村の排水路工事現場で測量する吉松さん

屯田兵の入植が地名の由来という、湧別町^{へいそん}兵村地区。そこで2年前から農業用排水路工事の現場に従事しているのが、遠軽町に本社がある(株)渡辺組の吉松京介さんです。現場に出て3年目、これまで兵村地区の工事を担当してきた吉松さんに会いに行ってきました。

「学びたい意欲を受け止めてくれた」

「祖父が建設業で、トラックの運転をしている姿を見て“格好いい、自分もやってみたい”と思いました」と言う吉松さん。湧別町出身の吉松さんは遠軽高校に入学し、卒業後は大学進学を目指していました。ところがお父さんが病に倒れてしまい、やむなく進学を断念。地元で就職先を探していたときに、社員として土木の基礎知識を学べる制度を取り入れていた渡辺組を知りました。

渡辺組が導入していたのは、札幌工科専門学校が採用している「企業委託生制度」です。採用した社員を委託生として同校に入学させ、2年間技術を学んでもらい、卒業後は2年間の実務を経れば2級土木施工管

理技士を、5年間の実務を経れば1級土木施工管理技士を受験できるという仕組み。夏休み期間を利用して現場体験もできるので、学びと実践を組み合わせながら、建設企業の新入社員教育の負担を軽減できる制度です。

吉松さんも給与をもらいながら技術を学び、夏休みには現場に出かけました。「夏休みに帰ってきて初めて行った現場では、重機とたくさんの作業員が印象的でした。すごく大きな現場で、ロングアームのバックホーを見て、こんな重機もあるんだと驚きました」とスケールの大きさに圧倒されたようです。

その現場が、今担当している兵村地区の排水路工事でした。この工事は平成25年度から始まっており、下流から上流に向けて工事が進められています。

吉松さんは専門学校を卒業し、平成28年度からこの工事の担当になりました。継続して同じ現場を任されたことで、自分自身の成長も実感しているようです。「測量や安全管理を担当していますが、測量も自分で計算して丁張り（工事の基礎となる位置や高さなどを

示す仮設物)をするなど、任せてもらえる仕事が年々増えてきました。安全管理では、書類作成も担当しています」と吉松さん。

5月に開催された渡辺組の安全大会では、会社の代表として吉松さんが交通災害の安全宣言を述べました。そのときの心境を「緊張しました」と思い出しながらも「現場は最盛期になると、重機も人も混在してくるので、重機の旋回内に作業員が立ち入らないように注意を促しています」と、現場を仕切りながら、安全を守るために気を配る真摯な表情をのぞかせます。

地域から頼りにされる企業として

吉松さんは、渡辺組で企業委託生制度を活用した第一号の社員です。吉松さんの後にも土木と建築を合わせて4人の社員がこの制度を活用しています。

渡辺組は40年以上前から地元の遠軽町に奨学資金の寄付を続けてきており、昨年度までの総額は約1億3,000万円にのぼっています。学びたい意欲のある若者を長年支援してきた実績があり、その延長で若者が地元に住み続けていくための一助になるように企業委託生制度を導入しました。

また、地域の雇用を守るために、建設業のみならず、農業や農・水産加工業など経営の多角化を図っています。近年は地域循環型ビジネスを目指して、森林経営も始めました。9月には遠軽町産のそば粉を使った手打ちそば店もオープンさせる予定です。一次産業から三次産業まで幅広く地域の産業に関わっていますが、



昨年度終えた兵村の排水路工事現場で

請われて始めた事業も多く、地域から頼りにされている企業であることを証明しています。

地元の遠軽高校は吹奏楽や山岳部、陸上部など、全国大会に出場経験がある部活動も多く、優秀な生徒が集まってきています。しかし、下宿先がないために遠隔地に住んでいると入学を諦めてしまう人も多く、そうした学生のために下宿運営の準備も始めているそうです。

地域の経済と雇用を守りながら、地域で困っていることに向き合う姿勢は、建設業が果たしている地域での役割を実感させてくれます。

醍醐味は完成したときの達成感

地域で頼りにされている企業の一員として、吉松さんも「一日も早く会社の戦力になれるように仕事を覚えていきたい」と言います。そして「今担当している現場でケガや事故のないように、今日、明日、一週間、1カ月と工期終了まで、しっかり安全管理をやりたい」と一歩ずつ前に進んでいく姿を思い描いています。

兵村の排水路工事で現場責任者として吉松さんを見守る相田康紀工事部長は「とにかく真面目なところが彼のいいところ。専門学校時代も忌引きを除けば無遅刻無欠勤でした」と、誠実な吉松さんの人柄を評価します。「ストレスが解消できているかが心配」と問いかける相田部長に対して「高校時代にソフトテニス部だったので、休日は地元の先輩に誘われてテニスをしています」と、4週6休の休日を利用して気分転換を図っていることを教えてくれました。

「現場では自分よりも年上の方がほとんどなので、当初はコミュニケーションを図るにも迷いがありましたが、今では今日は何をするのか、どうしたいのかをはっきりと言えるようになりました」と吉松さん。「工事が終わって完成した時の達成感がこの仕事の醍醐味。現場の写真を見ると測量のときはこうだったなあとか、いろいろ思い出します」と、この仕事を選んでよかったと実感しているようです。